

台風二十三号を体験して

豊岡市立寺坂小学校五年 小川 実咲

十月二十日、午前中は風が吹いているだけ

でした。夕方になるにつれて、だんだん雨が

激しくふり出し、風も一段と強くなりました。

四時ごろには、道路にたくさんのどろ水や

大木など、いろいろなものが流されていまし

た。道路が一本の川のようになっていました。

水の浅い時には、近所の人や身回りに来てお

られました。雨が風がひどくなるにつれて

見回りに入もこられなくなりました。

七時ごろ、家の裏の山がいつくずれるかわ

からないので、となりの家に避難させてもら

いました。お母さんとおじいちゃんには家に残

って、畳を上げたり二階に物を運んだりして

いました。お父さんはまだ職場から帰ってき

ていませんでした。となりの家の作業所が、

屋根までつかつているのが窓から見えまし

た。ゴロゴロ、ガラガラ、ガーンという音が聞こ

え、こわくてこわくてたまりませんでした。

次の日の朝早く、お母さんがむかえに来て
 くれました。永はもう引いていて、足道くら
 いまでしかありませんでした。家に入ると、
 畳がぐちゃぐちゃになっていて、私の家では
 ないみたいでした。少したってから、お父さ
 んががうクタの山をこえて帰ってきました。
 お父さんは、「みえな無事や」たんか。げが一
 つなくてよかったです。と泣きそうな声で言いな
 から、「私と妹をだきました。その時は、大げ
 さなことと言うと思います。たが、今から考え
 るとそのとおりで、たなと思います。
 次の日、親せきの人やお父さんの職場の人
 といっしよに、床下に入った。どろをとる作業
 をしました。西宮市からボランテアの人も
 来てくれました。その人は、「だれかの喜ぶ顔
 を見たいし、おたがい様だしね。」と話してく
 れました。私は、「こんな思いをしているのは
 私だけじゃないんだ、めげないでがんばらな
 きゃ」と思いました。そのときの気持ちは、今
 も忘れられませぬ。